

Vision as an Interactive Practice: Focusing on the Influences of Global Tourism on the Moken “Sea Nomads”

By Yuki Suzuki

Abstract: From 1957 to 2007, Thailand has seen its tourism industry expand by roughly 325 times to current numbers of more than 14 million annual tourists. During these 50 years of rapid growth, studies show how hill tribes have been objectified by the “tourists’ gaze” in a unilateral way. Absent from these studies has been a treatment of the inverse, namely, minority groups’ “vision” when interacting with tourists.

The aim of this paper is to investigate the relationship between minority groups and tourists in the Andaman Sea region in Thailand by focusing on the vision of the Moken “Sea Nomads”. Beginning with the Surin Islands being declared Thailand’s national park in 1981, adjacent islands and coastal areas along the Andaman Sea were registered as marine national parks. As a result of this change in regulation, the Moken’s foraging activity and nomadic movement has been restricted causing them to settle in the Surin Islands. This has not, however, deterred them from keeping their tribal ways as they continue to fish and gather whenever they can break free from the national park’s “eye” of supervision. Legally speaking, fishing in national park waters is prohibited, but there exists an unwritten rule between the Moken and state officials that allows for their fishing during the southwest monsoon season when tourism is discouraged. Although national park staff verbally order the Moken to refrain from fishing activity, the Moken continue to conduct their sea harvest, albeit away from the purview of the authorities.

By contrast, the northeast monsoon period is a time of heavy tourism during which the Moken are strictly prohibited from fishing. Similar to Thailand’s national park system, the Moken have adjusted their lifestyles to take advantage of tourism. Tourists find enjoyment from gazing at the Moken in their villages and watching sea creatures. While tourists observe the Moken, the Moken use this opportunity to sell their wares. Moken women profit from tourism by watching tourists and observing their money

habits. Then, they sell those souvenirs that attract the greatest attention at high prices. Meanwhile, Moken men help tourists “visualize” ocean life through snorkeling. While they point out popular sea creatures to tourists, they also cast their vision toward the sea for later foraging.

Although it cannot be denied that there exists an unequal political-economic balance of power between minority groups and tourists, this relationship should not be considered as anything static. The minority group is not objectified in a unilateral way by tourists. In order to understand the politics between these two groups, the interactive and dynamic relationship that vision plays must not be forgotten.

Keywords: Thailand, “Sea Nomads”, Moken, Vision, “Tourists’ Gaze”, Fishing Activities, Global Tourism, National Park

交錯する視覚 —観光のグローバル化が「漂海民」モーケンに 与えた影響に注目して—

鈴木佑記

【要旨】 2007年にタイを訪れた外国人観光客の数は、1,400万人を超えており、1957年の人数と比べると325倍も増えたことになる。この50年間における観光産業の急速な成長は、タイ国内に暮らす少数民族の生活にも影響を与えている。先行研究においては、山地民が観光活動に従事するようになった事実が提示されると同時に、山地民が観光客の視覚によって一方的に客体化されている問題が指摘されてきた。しかしながら、それらの研究では少数民族側の視覚についてはほとんど触れられていない。

本稿の目的は、「漂海民」モーケンを実例として、タイ領アンダマン海域の観光地における少数民族と観光客の関係性を考察することである。1981年にスリン諸島が国立公園に指定されると、アンダマン海域の島嶼と沿岸は次々と海洋国立公園のリストに載せられた。その結果、モーケンの漁撈活動と移動には制限が加えられ、彼らはスリン諸島に陸地定着するようになった。国立公園の指定区域内における漁撈は基本的には禁止されているが、国立公園側の裁量的措置により、島が閉鎖されている南西モンスーン期は魚介類の採捕が黙認されている。またモーケンは、たとえ採捕禁止の通達が出されても、国立公園事務所の監視の目を掻い潜りながら漁撈を行っている。

他方で、観光客に公開される北東モンスーン期には国立公園の管理体制が厳しくなり、観光業に従事するようになっている。スリン諸島に観光客が訪れるようになると、モーケンと海棲生物が「観光のまなざし」を受ける対象となり、観光客はモーケン村落を「見物」し、海棲生物に視線を投げかけることに楽しみを見出すようになった。その一方でモーケン女性は、村落を訪れる観光客をよく観察して、土産物品をより高く、効率的に売れるように対応している。また、海洋でシュノーケリング・ツアーのガイドを務めるモーケン男性は、観光客の視覚を満足させるために海棲生物を見てまわりながら、採捕対象となる魚介類を同時に採してもいる。

少数民族と観光客の間に政治経済的に不平等な力関係があることはたしかである。しかし、少数民族は観光客から一方的に客体化される存在ではないし、その2者関係を静的なものとして扱うべきではない。

少数民族とツーリストの間に横たわるポリティクスを理解するためには、相互に作用し合う動的な視覚のあり方に注目する必要がある。

【キーワード】 タイ、「漂海民」、モーケン、視覚、「観光のまなざし」、漁撈、観光のグローバル化、国立公園

はじめに ― 観光のグローバル化の進展 ―

近年における観光産業の発展は目を見張るものがある。1950年に各国が受け入れた外国人観光客の総数は約 2,530 万人であったのが (UNWTO 2008a, Annex-3)、2007年には 9 億 300 万人となっており (UNWTO 2008b, 3)、57 年間で 36 倍近く増加していることがわかる。また、移動人口の増加に伴う観光収入の総額も急激な伸びをみせている。1950年に 21 億米ドルであったのが (UNWTO 2008a, Annex-10)、2007年には 8,560 億米ドルと 400 倍以上も増えている (UNWTO 2008b, 3)。世界旅行ツーリズム協議会 (WTTC 2007, 5) が推計した、2007年の世界全体の観光産業の規模は約 5 兆 3,900 億米ドルであり、この金額は世界の国内総生産総計の約 10 パーセントにあたるという。距離のある地域間があらゆる路 (道路、線路、航路、航空路) で結びついてヒトの越境が活発化し、それに伴って膨大な量の情報や物資、そして資本が動いているのが観光をめぐる今日の状況なのである。超国家的なヒト、モノ、カネの移動というグローバル化の特質が、観光産業に顕著に現れているといえよう。

次節で詳述するように、観光産業の進展は本稿で記述対象となるタイでも顕著であり、国境を越えたヒトやモノの頻繁な往来を確認できる。いまや国家の周縁地域までもが (あるいは周縁地域だからこそより強く) 観光のグローバル化の影響を受けており、そうした地域に暮らす少数民族も観光産業と密接な関係を持つようになってきている。

例えば、NGO とエコツーリズムを協働運営するカレンの人々や (須永 2004, 70-72)、外国人が多く集まる市場において土産物を買うリスの人々 (綾部 2003, 99-103)、村に訪れる観光客にマッサージをしてお金を稼ぐアカの人々 (豊田 1996, 135) などについての存在も近年報告されるようになった。他にも、「首長族」で知られるパダウン (ないしカヤン) の村はトレッキング・ツアーのルートに組み込まれており (石井・チャイヤシット 2009, 108-12)、難民としてタイに逃れてきたパダウンの中には半強制的に移住させられた村落において観光客の「見せ物」となっている者もいるという (須藤 2008, 52-63)。このパダウンの事例では、観光客が少数民族に対して行使しうる優越的な政治経済的力関係を背景として、前者が視覚によって後者を一方的に客体化している問題点が指摘されている (須藤 2008, 67-69)。

これらの報告は、山地民が観光産業と関わりながら生活している実態を伝えており、タイ地域で暮らす少数民族の今日の状況の一側面をわれわれに教えてくれている。特にパダウンの事例では、観光客の視覚に注目することが、近年の少数民族をめぐる観光現象を理解する上で有効であることを示唆している。しかしながら、タイにおいて少数民族

がいかにして観光産業に関与するようになり、それが彼らの生活にどのような影響を与えたのかを考察した事例研究はまだ十分とはいえない。また、観光の現場における視覚の問題を、ツーリストの持つ「まなざし」¹のみで説明することは、少数民族が実践する様々な「見る」行為を看過してしまうことにならないだろうか。「まなざし」論が展開されているアーリの著書（1995）においてでさえ、「まなざし」を向けられる対象（特に少数民族）の主体性や視覚のあり方についてはほとんど触れられていない²。観光地においてツーリストを優位とする視覚の力学が働いていることが事実だとしても、客体化されてきた少数民族側の視点にも目を向けてみる必要があると筆者は考える。さらに、タイ地域に暮らす少数民族の分布は山地や平地といった陸域だけでなく、島嶼や沿岸の海域に広がっていることにも注意を払う必要があるだろう。

本稿では、「漂海民」として知られるモーケンを実例として、主にアンダマン海域における観光のグローバル化を取り上げる。そして、観光のグローバル化の進展によってモーケンの生活がどのように変わったのかという点だけでなく、彼らがその変化にどのように対応してきたのかという点について明らかにしたい。その際、モーケンの視覚のあり方に着目する。それにより、ツーリストと少数民族の関係のあり方についての理解をより鮮明なものにすることができると考える。また、モーケンに注目することで、これまで山地民が議論の中心であったタイの少数民族をめぐる研究状況を相対化できるとともに、世界の少数民族が直面している観光のグローバル化の影響を考察する際の比較材料を提供できると考える。

本稿の構成は以下の通りである。まず第1節において、タイにおける観光開発の歴史を振り返った後、アンダマン海域における観光化の進展過程を描く。第2節では、「漂海民」モーケンの伝統的な生活形態とスリン諸島に関する基礎的情報を提示する。第3節では、アンダマン海域の国立公園化がすすむ中で、モーケンがどのように陸地定着をするようになり、観光業へ参入するようになったのか、また従来の漁撈活動にいかなる変化が訪れたのかについて検討する。第4節では、観光業に従事するようになったモーケンの視覚のあり方に注目し、村落と海洋における仕事の場を事例として考察する。最後に、本稿の内容を整理した上で、少数民族とツーリストをめぐる視覚の問題について考えてみたい。

¹アーリ（1995, 2）は社会的に構造下され組織化されているものとして、ツーリストの観光対象に対する視覚を「観光のまなざし」という術語で表現した。本稿では、ツーリスト以外の視覚のあり方にも注目するため、単に「じっと見つめる」という意味で用いる際は鉤括弧を付けずに記述し、アーリの述べる「まなざし」と区別する。

²少数民族の主体性に関わる唯一の言及箇所は、地域住民のプライバシーがツーリストに観察されている例として、マサイ族を挙げている部分である（アーリ 1995, 102）。しかしながら、少数民族のツーリストに対する視覚については不明である。

1. タイにおける観光産業

1.1 観光立国への道程

インドシナ半島の中央に位置するタイは、ミャンマー、ラオス、カンボジア、マレーシアと国境を接しており、古くから他国の文化を吸収してきた。四方から流入してくる多様な文化の影響は、現代のタイにおいても言語や食習慣などに色濃く残っている。日本より約 1.4 倍大きい国土面積には、山地や高原だけでなく島嶼を含んでおり、その土地その場所ごとに自然景観が異なる。これらの豊かな文化と自然が魅力的な観光資源となり、タイは多くの人々を惹きつけてやまない。

とはいえ、地域文化や自然資源に恵まれているだけでは観光客は訪れない。観光化の進展のためには、電気や道路などの社会資本の整備や効果的なマーケティング活動、政府による観光推進政策などが不可欠である。タイにおいても、政府によって積極的な観光政策の立案と遂行がなされてきた。以下、観光開発が着手されるようになったサリット政権（1958-1963）の時代からみていくことにする。

サリットは開発（การพัฒนา）という概念をタイ社会に導入し、民間主導型の工業化政策を推進した首相である。外資導入を促す産業投資奨励措置を講じ、輸出指向型の工業化を推し進めることによって、タイの経済は急速な成長を遂げた。彼は地方視察を繰り返し、農村地域の開発も同時に行っていた。特に道路網の整備が開発推進のためには肝要であると認識しており（柿崎 2002, 3）、道路の舗装化に力を入れた。

さらにサリットは、インフラストラクチャーの整備に尽力しただけでなく、観光産業の振興にも力を注いだ。現タイ国政府観光庁（TAT=การท่องเที่ยวแห่งประเทศไทย, 1979年5月5日に名称変更）の前身であるタイ旅遊奨励公団（TOT=องค์การส่งเสริมการท่องเที่ยวแห่งประเทศไทย, 1960-1979）を発足させているのである。サリットは公団開設のセレモニーにおいて「タイ人民の文化や美徳を世界中の人々に知らしめること」（Caruwat 1960, 9）が公団の使命であると説き、タイの魅力を外国に伝えることが観光振興に結び付くことを確信していたようである。また、彼が視野に入れていたのは国外の人間だけではなく、国内の人間に対してもアピールを忘れてはいない。地方 19 県の政務調査視察からバンコクに戻ったサリットは、1961年6月1日に記述した国民に向けた挨拶文の中で次のように述べている。

私がここで述べたいことの一つは、われわれ（タイ人）がタイ国内を観光することは、民族を愛し、国を愛する気持ちを促し、われわれの国家が燦然と繁栄するよう希求する強い気持ちを増大させるのに重要な手段の一つとなるということです。さらには、（タイ国内を観光することは）自分が所属する国家に対して自信を与えてくれ

る一つの方法となるのです・・・中略・・・だから私は、われわれタイ人が今まで以上に、タイ国内を旅行することを奨励したいのです（括弧内は筆者による）（Sarit 1961, 35-37）

こうして始動した観光開発ではあるが、政府が本腰を入れて取り組むのは 1970 年代に入ってからのことである。1961 年よりすすめられている国家社会経済開発計画の第 4 次計画（1977～1981）において、はじめて観光が開発計画の中に盛り込まれた（城前 2008, 76）。これ以降、以前にも増してインフラストラクチャーの整備や観光市場の開拓がすすみ、1982 年には米の輸出高を抜いて観光産業が外貨獲得源のトップとなった（末廣 1993, 90）。1980 年代中葉には、経済発展によって出現した都市部の中間層向けへの観光促進活動も活発化した。そうしたタイにおける観光開発の成果は、数字で把握することで明瞭となる。1957 年にタイを訪れた外国人訪問者の数は約 4 万人であったのだが、2007 年になると約 1,446 万人にまで増えている（表 1）。実に 50 年間で約 325 倍の伸びである。国際収支ベースの観光収入に関しては、1957 年に 510 万米ドルであったのが 2007 年には 156 億米ドルへと、約 3,058 倍増大している。国内旅行をするタイ人も 1987 年は約 4,600 万人であったのが、2007 年には約 8,300 万人と約 2 倍に増えており³、国内市場における観光収入を合わせると、2007 年には 260 億米ドル以上の収入が観光産業から生み出されたことになる（TAT n.d.1, 10; TAT 2008a; TAT website）。

表 1 タイを旅行した人数の詳細

年		1957	1987	1998	1999	2007
観光客数 (人)	外国人	44,375	3,482,958	7,764,931	8,580,332	14,464,228
	タイ人	—	46,161,392	51,681,035	53,624,843	83,234,780

海外向けの観光マーケティングも盛んに行われ、「タイ観光年」（Visit Thailand Year, 1987）や「タイ手工芸品年」（Thailand Arts and Crafts Year, 1988）、「アメージング・タイランド」（Amazing Thailand, 1998）などのキャンペーンが次々と展開された⁴。特に「アメージング・タイランド」キャンペーンは、実施年度がアジア通貨危機発生の翌年ということもあり、雇用創出と外貨獲得の増加を促すものとして期待されていた

³ 2007 年現在、公式統計によるタイの人口は 63,038,247 人である。統計資料上に算出の根拠とする記述は見当たらないが、国内旅行者数の方が人口よりも高い数字を示しているのは、1 人が 2 ヶ所以上の土地を、あるいは 2 回以上の観光をした数字をもとにして計算されたからだと思う。

⁴ これらのキャンペーン以外にも、プミポン国王（ラーマ 9 世）生誕 70 周年（1997）に合わせて、TAT が「異国情緒溢れるタイへようこそ」（Come to Exotic Thailand）というスローガンを用いて外国人ツーリストを呼び込もうとしたが、アジア通貨危機と重なったこともあり訪タイ者数は増えなかった（Peleggi 2002, 65）。

(Cohen 2004, 297)。キャンペーン実施後2年間で、合計1,700万人の外国人観光客をタイに呼び込むという当初の目標数字にはわずかに届かなかったものの（結果は約1,635万人）、1999年の訪タイ者数は前年比10.50パーセント増しており、初めて800万人台に突入している。それから10年も経たない間に1,400万人を超える旅行者がタイを訪れるようになったことから、着実に観光客を増やし、タイが観光立国としての地位を確立してきたことがわかる（TAT 2008a, 13）。

1.2 アンダマン海域における観光開発

タイを訪れる観光客は首都バンコクを拠点として、列車や車を利用して近隣県へ足をのびたり、飛行機に乗って北部のチェンマイや南部のプーケットへ移動したりする（図1）。それら3つの都市が結節点となって南北をつなぐ「観光軸」（tourism-axis）をつくりだしており（Cohen 1996, 7）、この軸に沿った地域に観光客は集中してきた。そして近年、この軸線は南北の国境に向かって徐々に伸びているという（Cohen 2004, 298）。本項で取り上げるスリン諸島はパンガー県に属しており、同県はプーケット県と隣接している。ここではタイ南部西海岸、つまりアンダマン海域における観光化の進展状況を把握するために、



図1 プーケット島とスリン諸島の位置

握するために、枢軸県の一つであるプーケットを中心に見ていくことにする。そうすることで、どのように「観光軸」が拡張し、パン

ガー県を訪れる観光客が増えてきたのか確認したい。

タイ南部はマレー半島部分に位置しており、14県を擁する。ヤラー県を除くすべての県が海に面しており、古くは港市国家が栄えるなど、歴史的に海と密接な関わりを持つ空間であった。とはいえ、半島部の東海岸と西海岸とは地理的な特徴は異なる。東海岸では発達した砂州が目に入るのに対し、西海岸では繁茂したマングローブ林が目をはく。島

嶼も西海岸に集中しており、同じ海域世界でも景観を異にする。タイ最大の島であるプーケット島も西海岸に位置しており、このタイ南部西海岸の海域をアンダマン海と呼ぶ。観光地プーケットを隠喩する際によく使われる「アンダマン海の真珠」という言葉があるように、プーケットは美しい自然景観を持つマリン・リゾート地として開発されてきた。とはいえ、観光地としてのプーケットの歴史はそれほど古くはない。

プーケットはバンコクの南 862 kmに位置する、淡路島と同程度の面積を有する島である。観光地化する以前は錫が採掘できる場所として有名であり、多数の華人が労働者として流入していた。しかし 1970 年代に入る頃には錫採掘は衰退し始め、新たな産業として観光が脚光を浴びるようになった。1976 年には国際空港が開業し、美しいビーチを求めて国内外から観光客が訪れるようになった。ただし、観光化が始動した当時は、プーケットの地は外国人に今ほど知られてはいなかった。空港が開港した翌年にプーケットを訪れた人数は約 6 万人であるが、そのうち外国人観光客が占める数は約 2 万人である⁵ (TAT n.d.2, 4-5)。1970 年代のプーケットは、外国人よりもタイ人の観光客の方が多く訪れる場所であった (表 2)。

表2 プーケット県・パンガー県を旅行した人数の詳細

年	プーケット県			パンガー県		
	外国人	タイ人	合計(人)	外国人	タイ人	合計(人)
1977	21,900	36,100	58,000	—	—	—
1987	348,065	348,909	696,974	29,887	217,119	247,006
2007	3,283,410	1,722,243	5,005,653	548,515	612,020	1,160,535

ところが、1970 年代後半から政府主導による観光開発がすすめられ、白い砂浜の後背地に宿泊施設や娯楽施設が次々と建ち並び、ビーチを中心とする一大観光地へと変貌を遂げた。2007 年には約 500 万人の観光客がプーケットを訪れており、1977 年と比較してその数は約 86 倍の増加をみせている。注意を払うべきはその数字に含まれる外国人の内訳である。約 500 万人の内約 328 万人が外国人観光客なのである (TAT 2008b, 225)。これを 1977 年の数字と比べると、実に 30 年間で約 150 倍も増加したことになる。プーケットと隣接するパンガー県においても、1987 年に訪れた観光客数は約 25 万人であったのが (TAT 1988, 21-22⁶)、2007 年には約 116 万人にまで増えている (Phanga Province

⁵ 引用文献では、仕事目的で訪れた者を含めて観光客数を記載しているが、ここでは人数を差し引いた数を記入した。

⁶ 引用文献の 21 頁に外国人観光客 (นักท่องเที่ยวต่างชาติ) の記述が 2 つあるが、前者は誤植である。正しくはタイ人観光客 (นักท่องเที่ยวไทย)。

Office of Tourism and Sports website)⁷。タイ南部西海岸でも観光のグローバル化は進んでおり、アンダマン海域を目指すツーリストはもはやプーケットだけでなく、その近隣県にまで足を運ぶようになっているのである。

国際空港の設置とビーチ・リゾートの開発がアンダマン海域を訪れるツーリストの増加を促したことは容易に想像できる。しかしながら、具体的にアンダマン海域の何が観光資源となったのであろうか。この点に関して、海洋の観光資源化の実態について、市野澤（2010, 17-18）は次のような重要な指摘をしている。

海岸線に沿って分布する造礁サンゴの群生域と岩礁地帯・・・中略・・・リーフの観光資源化は、タイの領海においても急速に進行しており、観光の場としてのサンゴ礁の経済価値を高く見積もる推計結果が、タイ南部の海中国立公園に関しても提示されている・・・中略・・・海岸線に沿った非常に狭い（大半が 100m にも幅が満たない）エリアであるリーフは、観光開発という新たな文脈の中に置き直されることによって、零細漁民が細々と生業を営む場から、多くの国際観光客を惹きつける金の成る木に変貌したのである

畢竟するに、アンダマン海域ではリーフが観光資源となった。かつての地域住民にとっての小規模な漁撈活動の場が、グローバルな市場価値のもとで開発がすすめられ、ツーリストにとっての娯楽活動の場へと様変わりしたのである。観光化が進展した近年のアンダマン海におけるリーフでは、海棲生物を〈獲る〉対象ではなく、シュノーケリングやダイビングで〈見る〉対象として資源化がすすめられた（市野澤 2010）。実際、ダイビング・ショップがプーケットを中心として増加した 1990 年以降（市野澤 2009, 103）は、カオラックを拠点としたシミラン諸島とスリン諸島をめぐるクルーズ船が多数出るようになっている（図 1 を参照のこと）。今や「観光軸」は南北の国境に向かって伸びるだけでなく、西の国境にまでその幅を広げているといえよう。

その結果、昔からアンダマン海のリーフで漁撈をしてきたモーケン人は、観光化という新しい社会変化に直面することになった。次節では、「漂海民」モーケンの伝統的な生活形態と、筆者が調査を実施してきたスリン諸島の自然環境について整理する⁸。

⁷ 実は、2004 年には 2,894,654 人ものツーリストがパンガー県を訪れていた。しかし、同県は 2004 年 12 月 26 日発生のインド洋津波による被害が最も大きかった地域であり、2005 年以降の訪問者数は急激に落ち込んだ。

⁸ 本稿が依拠するデータは、2006 年 1 月から 2008 年 9 月にかけて断続的に行った現地調査で収集したものである。特に第 4 節で使用しているデータは、2008 年度のスリン諸島公開期（2007 年 11 月 16 日～2008 年 5 月 3 日）の内、2007 年 11 月から 12 月、2008 年 2 月から 4 月にかけて実施した計 4 ヶ月の現地調査で得た情報に基づいている。

2. スリン諸島のモーケン

2.1 「漂海民」モーケン

東アジアと東南アジアの多島海には船を住居とし、漁撈を主な生業として暮らす人々が多くいた。そうした集団を指すのに、「漂海民」「船上生活者」「漂泊漁民」「海人」「家船」⁹「海洋民族」「水上居民」「海のジプシー (Sea Gypsy)」など、地域や時代によって様々な呼び名が用いられてきた。これらの中でも様々な地域を対象とした研究の中で、特に多く用いられている呼称の一つが「漂海民」であろう。

旧来の定義では、「漂海民」とは以下の 3 条件を備えていた人々とされる。

- ① 土地・建物を陸上に直接所有しない
- ② 小舟を住居にして一家族が暮らしている
- ③ 海産物を中心とする各種の採取に従い、それを販売もしくは農作物と物々交換しながら、一カ所に長くとどまらず、一定の海域をたえず移動している (羽原 1963, 2-3)

つまり、土地を有さず船を住居にして、漁撈を生業とする移動民とされてきた。ところが現在では、後述するモーケンのように、社会変化に伴い家船生活を放棄して、陸上生活を送る者が増えている。そうした大きな潮流がある一方で、日本において近代 (明治末期～大正) になって生活の場を陸から海へと移行した新たな「漂海民」の出現が指摘されるなど (金 2003, 53-83)、生活形態が多様化してきているのが現状である。もはや、船住まいであることだけが「漂海民」を規定する唯一の物差しではなくなっただけでなく、海域と陸域における日常生活を同時に見つめることが今日の「漂海民」を理解するためには肝要であろう。そこで本稿では従来の定義に、「現在では特定の土地に生活の場を有している場合も多いが、かつては船を生活の拠点として漁撈活動をするために移動生活を送っていた集団」という一文も付け加え、「漂海民」という言葉を扱うことにしたい¹⁰。

⁹ この用語は、「①陸に家と土地を持たないいわゆる日本の伝統的な船上生活漁民」を指す場合と、「②家屋 (建物) として使っている船自体」を指す場合がある (金 2003, 4)。本稿では、鉤括弧付きのものを前者、鉤括弧無しのを後者の意味で使用する。

¹⁰ そうすることで初めて海陸両域を生活の場とするモーケンの現状を把握することができ、旧来の「漂海民=海に特化した民族」という定義に再考を迫ることが可能であると考える。

モーケンもかつてはカバン (*kabang*) と呼ばれる船を住居にして、移動性の高い生活を送ってきた人々である。そのため、モーケンを表象する際には「漂海民」という言葉が幾度となく用いられてきた。総人口は約 2,800 人とされ¹¹、タイ領とミャンマー (ビルマ) 領のアンダマン海域に浮かぶ島々と沿岸を舞台に移動生活を送ってきた (図 2)。カバンの他にもチャパン (*chapan*) と呼ばれる、櫂や櫂で推進力を得る丸木舟 (単材刳船) を利用している。チャパンは主に浅いリーフで漁撈する際に活躍する。

カバンはその形態から新旧 2 種類に分けることができる。旧型と新型を分ける大きな違いは船の材料と構造にある。旧型カバンは舷側に棕櫚の茎 (ヤシの葉柄) と竹が用いられていたこと、また航海には櫂と棕櫚の葉で作られた帆が使用されていたことがわかっている

(ホワイト 1943, 51-60)。新型カバンは舷側に合板が用いられ、小型エンジンを搭載している。全長は、旧型が 7~8m (ベルナツィーク 1968, 28)、新型が 7~12m 程度である。旧型から新型への移行がすすんだのは 1970 年代と考えられている (鈴木 2010, 158)。

新旧両型に共通しているのは、舳と艫が 2 叉状になるという構造的特徴をもち、基本的に一世帯が一隻の船に暮らすという点である。男性は嫁娶後に親元のカバンを離れて自らの船を造るのが習わしで、古くは一つの家船集団 (船隊) は 4 から 40 隻ほどの家船で構成されていた¹² (Carrapiett 1909, 7)。この集団を統率するのが、モーケン語で年長者を意味するポタオ (*potao*) と呼ばれる男性のリーダーである¹³ (Ivanoff

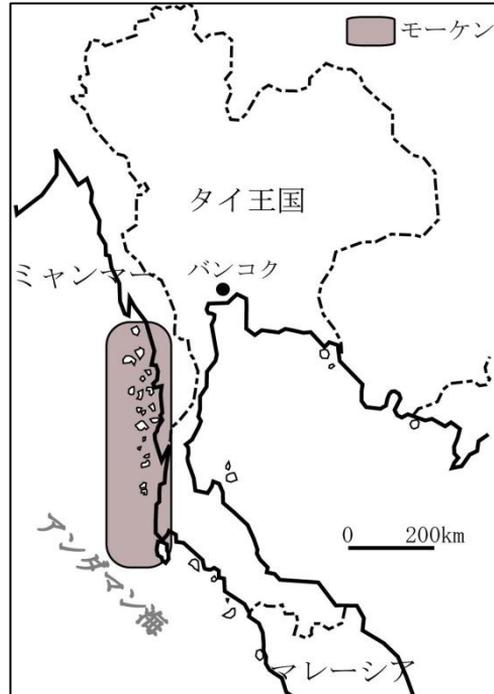


図2 モーケンの分布或

¹¹ アンダマン海域に暮らす民族集団は、モーケンの他にモクレン、ウラク・ラウオイッがいる (鈴木 2006)。チュラーロンコーン大学社会調査研究所による人口推計は、モーケンが 2,800 人 (ミャンマー領 2,000 人、タイ領 800 人)、モクレンが 2,500 人、ウラク・ラウオイッが 4,000 人である。

¹² ベルナツィーク (1968, 28) は 10 から 30 隻、Ivanoff (1997, 3) は 10 隻ほどで一つの家船集団が構成されていることを報告している。

¹³ シヤーマンとしての役割や、よそ者が近づいて来た時に最初に接触する役目も果たしてきた (Ivanoff 1997, 6)。

1999, 107)。彼はその日の大気の状態や風の状況を見極め、漁場や移動経路、また停泊地などを決定してきた。

ポタオが最も注意を払っているのが風である。特に、アンダマン海域にはモンスーンが吹き込むので、季節ごとの風の特徴を把握している必要がある。天候が良く海が穏やかな北東モンスーンの季節（乾季の 11～4 月）には、毎日のようにリーフに出かけて魚介類を採捕するのが普通であった。それでも突然の風雨に襲われ、波が荒立つこともあるので、ポタオは漁に出ている最中も常に注意深く風の状態をみる必要がある。ポタオの判断が集団生活では何よりも重要であり、海上での移動生活のあり方を決定づけていた。

海と関わりの深い「漂海民」といえども、陸域での活動も欠かすことはできない。採捕した魚介類を米や野菜と交換するために本土へ運んだり、真水を得るために定期的に陸地に上がったりする。特に陸域での一時的な生活を余儀なくされるのが南西モンスーンの季節（雨季の 5～10 月）である。この期間も風や波が穏やかであれば乾季の時期と同様に移動を繰り返してきたが、天候不順時には島嶼や沿岸の砂浜に杭上家屋を建築し、強風や波浪を避けて生活する。通常は、杭上家屋を設けた島を拠点にして暮らすようになるので、雨季の半年間は定住性の高い人達といえよう。観光化がすすむ以前のスリン諸島も、南西モンスーン期に風濤を避けるための待避地の 1 つとしてモーケンに利用されていた。

2.2 スリン諸島の自然環境

スリン諸島は、首都バンコクから南西方向に約 720km、タイ本土にある最寄りのクラブリ港から西方に約 60km 離れた場所に位置する。パンガー県クラブリ郡の管轄区域に属しているものの、タイの本土へ渡るよりもミャンマー領内の島へ移動する方が近く、タイの領海では辺境の地にあるといえる。同諸島は北スリン島と南スリン島という 2 つの大きな島と、ストック島、カイ島、マンコン島という 3 つの小島から構成されている（図 3）。北スリン島と南スリン島の両島には入り江が多く存在し、モーケンは古くから船の停泊地として利用してきた。マングローブ林や砂浜も点在しているが、その後背は急勾配な小山で占められており、平地面積の率が低いのが地形的特徴である。

南西モンスーンの季節にしかまとまった雨は降らないが、年間降水量は 3000mm と多く、気温と湿度も高いため熱帯雨林が叢生している。豊かな森にはマメジカやブタオザルなどが棲みついているほか、カザリオウチュウやサイチョウなどタイでは比較的珍しい鳥類もみられる。沿岸には発達したサンゴのリーフが広がっており、アンダマン海域のサン

ゴ礁に生息する魚類の多くが集まっているとされる¹⁴ (Thon and Anuwat 2007)。また魚類だけでなく、ロブスターなどの甲殻類やシャコガイなどの軟体動物、それにナマコなどの棘皮動物も棲息しており、リーフは生物の多様性が高い空間といえる。スリン諸島の場合、造礁サンゴの群生が見られるのは水深 30m 以浅である (Krom Pamai n.d., 31)。このことはサンゴ礁の成長に欠かせない太陽の光が 30m の深さまで届いていることを意味しており、海がきれいで透明度が高いことを示している。モーケンにとって、スリン諸島が波浪の待避地としてだけではなく、漁撈活動の場としても非常に魅力的な場所であったことがわかる。

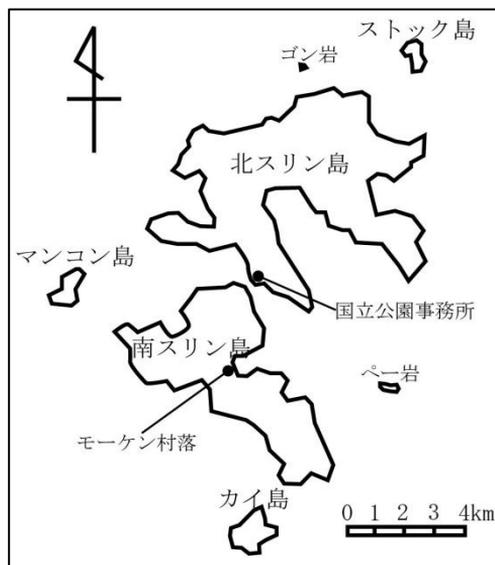


図3 スリン諸島地図

ところが、貴重な生態系を擁すスリン諸島に目をつけたのはモーケンだけではなかった。自然保護の対象地域として、政府の目にも留まったのである。サリット政権時代の 1961 年に国立公園管理法が施行されて以降、タイ政府は国内の自然豊かな地域を次々と国立公園に指定してきた。ただし、人間の介入を可能な限り排除することが前提であるはずの保護 (preservation) ではなく、観光客の利用を許可するなど、人間による利用を前提とした保全 (conservation) の思想のもと行われているのが、タイにおける国立公園の管理のあり方である (鈴木 2010, 180)。国立公園の文脈における保護と保全の思想の最も大きな違いは、前者が国家主導で自然環境の非資源化を目指しているのに対して、後者は政府が自国の利益になるための資源化を視野に入れている点にあるといえる¹⁵。

1971 年 12 月 30 日に森林局により保護林地区に指定されると、1981 年 7 月 9 日にはスリン諸島とその周辺海域が国立公園として指定されることとなった。タイの国立公園としては 29 番目の、海洋国立公園とし

¹⁴ セミホウボウやスジモヨウフグといった一部の魚類は、スリン諸島周辺海域では今のところ確認されていないようである。

¹⁵ 政府は保全の思想のもと、観光客による国立公園の利用を受け入れているが、無制限に認めているわけではない。国立公園・野生動物局は 2007 年 11 月 20 日に、スリン諸島を含む 10 ヶ所の国立公園への入場者数を制限する通達を出した (DNP 2007)。制限の実施は 2008 年 7 月 1 日からである。国立公園に訪れる観光客が増大し、自然環境への負荷が高まっていることを憂慮した措置であった。

ては 6 番目の指定であった。指定区域は 135 平方 km であり、この内の陸地総面積は 33 平方 km である。

国立公園に指定されたこの年より、モーケンは行政機関関係者との接触を本格的に持つようになる。王立森林局職員が調査のためにスリン諸島へ訪れるようになり、モーケンも島内の自然資源に関する情報を提供するようになったのである。スリン諸島の自然環境をめぐる「少数民族—行政機関—ツーリスト」の 3 者関係はこの頃から始まった。

3. 国立公園化によるモーケンへの影響

「おい、海のジブシー、もう見たか？見物しに行こうじゃないか」
(ロチャナブルック 1999, 201)

この発言は、取材のためにスリン諸島を訪れていたタイ人ジャーナリストが、ツーリストの発した言葉を記録したものである。「海のジブシー」とはモーケンのことを指している。日付は 1993 年 5 月 13 日、国立公園に宿泊していたタマサート大学の学生が、同行している仲間に向けて叫んだ言葉であった。この発話は、観光地におけるツーリストと少数民族との間に横たわる、不平等な力関係をはっきりと示している。このツーリストにとってモーケンは、視線を投げかける対象としてスリン諸島に存在するのである。しかし、これから徐々に明らかにしていくように、モーケンは他者（ツーリストや国立公園事務所スタッフ）の視覚に完全に「所有」されるような受動的な存在では決してない。

本節では、スリン諸島が国立公園に指定されたことで、どのように観光地化していったのか、その過程を描く。それと同時に、どのようにツーリストが楽しみ対象としてモーケン村落に目を向けるようになったのか、また国立公園事務所が一張一弛の監視の目をモーケンに向けるようになったのか、その背景とモーケンの対応を説き明かしていく。

3.1 観光業への従事と陸地定着化

1981 年に国立公園に指定されたスリン諸島であったが、まだ一般大衆向けには開放されていなかった。正式に公開されるのは 1985 年 4 月 28 日からである。これ以降、一般人も毎年北東モンスーンの季節のみ訪問することが可能となり¹⁶、シュノーケリングとダイビングを主目的とする

¹⁶ 一般人がスリン諸島を訪れることができる期間は、乾季（通常 11 月中旬～5 月初旬—年度によっては 10 月中旬～5 月中旬—）のみと限定されている。雨季に島が閉鎖されるのは、天候不順のため海に船を出すことが危険であるというのが理由である。雨季のア

ツーリストが集まるようになった。スリン諸島のリーフは、モーケンと政府役人だけでなくツーリストをも惹きつけ、多くの主体が絡み合う空間となった。

島にツーリストが訪れるようになったのは 1986 年からである。北スリン島に国立公園事務所が設けられ、手洗所や食堂の建設などが進められた。一部のモーケン男性は国立公園事務所のもとで船の舵手として雇用労働に従事するようになり、女性や子供はツーリストに対してタカラガイの貝殻を売ようになった。その他にも、国立公園事務所が海亀の卵を一つ 3 パーツ (約 9 円) で買い取ることを告知すると、モーケンはそれまで食べる対象としか見ていなかった海亀の卵を売ようになった (Hinshiranan 1996, 147-48)。モーケンにとって海中景観を構成する一部以上の意味合いを持たなかったタカラガイには商品価値が与えられ、食用としての海亀の卵は換金可能な資源へと意味付けが変化したのである。

こうした国立公園事務所スタッフとツーリストとの接触は、モーケンの自然環境に対する視覚のあり方に変化を与えたことがわかる。海中で視野を広げてタカラガイを探したり、海亀の卵を売り物として見つめるようになったりした。また、それまで仲買人を通してのみ現金を得ることができ、換金時の重量計算で取引金額を騙されることの多かったモーケンにとって (Bernatzik 1939, 24)、消費者と直接交渉をしてお金を稼ぐことは新鮮な経験であったに違いない。

ちょうどその頃、スリン諸島に陸地定着するモーケンが現れてきた。ツーリストが訪れる乾季のみスリン諸島で暮らす者も少なからずいたが、船で移動生活するモーケンは急激に減少していった。その導因となったのは、政府によって次々と進められたアンダマン海域の海洋国立公園化である。スリン諸島が国立公園に指定されて以降、1982 年にシミラン諸島、1986 年にタイムアン地域、1991 年にカオラック地域などと、スリン諸島周辺の海域が続々と海洋国立公園リストに追加されていった。国立公園に指定された区域では土地の所有が認められず、生態系に危害を加えるような行為は固く禁じられている。指定区域内で勝手に木材を伐採して家を建てて暮らすことは許されないし、動植物を狩猟採集することも認められない (DNP 2004, 13-14)。1980 年代以降、政府によって推し進められたアンダマン海域の国立公園化は、モーケンの伝統的な生活を全否定することと同義であった。住まいであり移動手段でもあるカバンを造船・修復することは困難となり、漁撈活動が制限された結果として陸地定着するようになったのである。モーケンは社会環境の変化に対

ンダマン海ではほぼ毎年、風濤に曝されて船が沈没する事件が起きている (cf. Phuket Gazette website 2007, 2008, 2009)。

応するために、伝統的な生活形態を見直し、観光など他の生業活動に取り組む必要が出てきた。

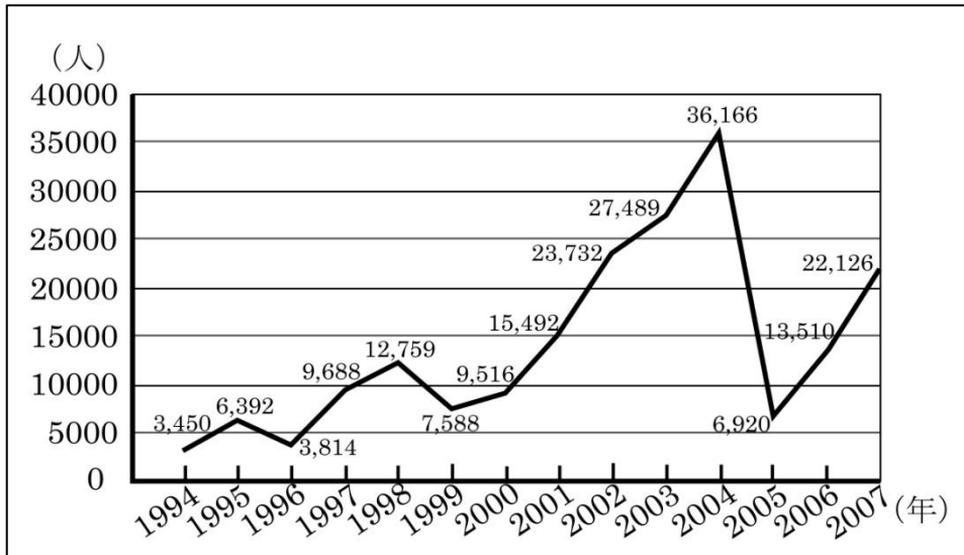


図4 スリン諸島訪問者数の推移(DNP website 公開の統計資料をもとに作成)

1990年代に入ると、宿泊者向けの施設やサービスが充実して、島を訪れる観光客が徐々に増えていった(図4)。そのため、国立公園事務所スタッフだけでは手が回らなくなり、以前よりも多くのモーケンが公園事務所の提供する賃労働に従事するようになった。男性の主な仕事は、船を操舵して国立公園側があらかじめ指定するシュノーケリング・ポイントまで観光客を送ることであり、女性の主な仕事は、砂浜やテントなどの掃除、それに食器洗いである¹⁷。従来のモーケンにとっての北東モンスーン期(乾季)は、漁撈活動に専念する時期であったのだが、より安定した現金収入を得るためにスリン諸島に住みつき、観光業に従事する者が増えたのであった。

それと同時に、モーケンが恒常的な家屋を建てて特定の場所に集住するようになると、モーケンを「見物」するために村落を訪れる観光客も出てきた。国立公園事務所の窓口を用意されているスリン諸島の無料パンフレットには、奨励する観光活動としてシュノーケリングやネイチャートレイルをすることの他に、モーケン村落を訪れることが挙げられている。そこには、モーケン村落は「文化的に興味深く、訪問する

¹⁷ 1日7時間労働(8~12時, 13~16時)で110パーツ(約330円, 1パーツ≒3円)がモーケンに支払われている。また繁忙期には、夕方から夜までの4時間労働(17~21時)に対しても110パーツが支払われる(2008年4月現在)。

だけの価値を持つ、ローカルなアトラクションである」と紹介されている (DNP n.d.)。観光の文脈においてモーケンは、スリン諸島にツーリストを惹きつけるための「呼び物」の一つとして扱われ、またツーリストの好奇心を満たす存在として見られている。

スリン諸島の観光化がすすむ一方で、国立公園事務所によるスリン諸島と周辺海域の管理が強化されていった。例えば、それまで黙認されていたモーケンによる各種貝類の販売が禁止されるようになったり、食用として稀に採捕していたロブスターや海亀の捕獲が厳しく取り締まられるようになったりした。その理由を所長補佐¹⁸に尋ねると、「スリン諸島は国立公園法が適用されるため、漁撈活動は認められない」ことを第一に挙げたが、他にも「(シュノーケリングやダイビングに訪れた) ツーリストが好む魚介類の個体数を減らしてはならない」というもう一つの考えがあることも教えてくれた (丸括弧内は筆者による加筆)¹⁹。国立公園指定後もしばらくは貝類の販売を認め、ロブスターなどの採捕も厳しく咎めなかった事実を考慮するならば、前者が建前であり後者が本音であると考えるのが普通であろう。要するに、スリン諸島のリーフはツーリストによる利用が優先されるべきであり、先住民による利用は国家に利益をもたらすものではないので制限すべきである、というのが国立公園当局の立場である。〈獲る〉海だったタイのリーフは〈見る〉海へと変貌を遂げたという市野澤 (2010, 32) による指摘は、ここスリン諸島にも当てはまるようにみえる (この点に関しては第 4 節第 2 項で検討したい)。

2001 年に入ると、スリン諸島を訪れるツーリストはさらに増えていった。2000 年度²⁰の入島者数は 1 万人に満たなかったのだが、2004 年度には 3 万 6,000 人を超えた。2005 年度は、2004 年末に発生したインド洋津波の影響によりツーリストの足は遠のいたものの、2006 年度以降は再び訪問者数が増えている (図 4 を参照のこと)。1990 年代にはまだ数千人程度だったツーリストは、今や数万人規模となった。平地部に限られた狭い島空間に、しかも半年の間に数万人が押し寄せるのだから、そのサービスに従事する人員も相当数必要である。それまでよりも多くのモ

¹⁸ スリン諸島国立公園には所長 (หัวหน้า) の下に、3 名の所長補佐 (ผู้ช่วยหัวหน้า) がいる。モーケンや事務所スタッフは所長補佐と呼んでいるが、実際には、サービス向上部門チーフ (หัวหน้าฝ่ายบริการและพัฒนา)、資源保護学術部門チーフ (หัวหน้าฝ่ายวิชาการและฝ่ายอนุรักษ์ทรัพยากร)、総合管理部門チーフ (หัวหน้าฝ่ายบริหารทั่วไป) という正式な役職名称がある。いずれのチーフもモーケンの活動全般を監視し、時にその生活のあり方に注文を出してくる。

¹⁹ 2007 年 11 月 26 日のスリン諸島チョンカート湾におけるスリン諸島国立公園 Tai 所長補佐へのインタビューによる。本稿で示すインタビュー内容は、すべて筆者によって収集されたものである。例えば、アオブダイやカクレマノミといった彩り鮮やかなものや、海亀などが好まれるという。

²⁰ タイでは 10 月から 9 月までを一つの年度として数える。例えば 2008 年度の場合、2007 年 10 月から 2008 年 9 月までとなる。

ーケンが、観光客にサービスを提供する賃労働に従事するようになった。

3.2 漁撈時期の反転

アンダマン海広域が国立公園に指定されたことで、モーケンも観光産業に深く関わるようになった。しかしながら、観光客がスリン諸島を訪れることができるのは、北東モンスーン期である乾季のみである。では、南西モンスーン期は何をして過ごしているのだろうか。その答えは、既述した内容と矛盾するようではあるが、漁撈活動である。「それでは、指定区域内における狩猟採集を禁止するという国立公園法は何のためにあるのか」、というもっともな疑問が浮かんでくるであろう。

たしかに、法規に基づくのなら国立公園指定区域内における漁撈は決して許される行為ではない。ところが、モーケンも国立公園指定以前よりスリン諸島で生活してきた「先住民」である。一昔前ならば国立公園だからという理由で、山地民の立ち退きを威圧的に要求したように（細川 2003, 10-11）、モーケンも指定区域内から強制的に追い出すことができたのかもしれない。だが今は、先住民の権利を守ろうとする動きが世界中で活発になっており²¹、タイ政府も強引な行動は起こせない。行政側は、国立公園法ができるずっと以前より暮らしてきたモーケンの権利を尊重し、自給自足ができる程度の狩猟採集を非公式に認めているのが現状である。

また人間社会では、法律が制定され成文化されていなくても、その時その場所の実態に合わせた裁量的措置が行われることがある。特にタイにおいてはそうであり、藤田（2008, 98）はタイ東北部の「多くの国立公園・野生動物保護区では、区域内や周辺に暮らす住民が自給目的で資源を利用することは黙認されている」ことを報告している²²。地域住民の生活の実態に合わせた管理を行っているというのである。そのような裁量的措置はスリン諸島でも行われており、モーケンによる自給目的のリーフの資源利用は黙許されているだけでなく、商業目的の利用もしばしば黙過されている。

なかでも、国立公園側がモーケンによるリーフの資源利用を大目に見ている時期が、閉鎖期間中の南西モンスーンの季節である。年によって時期は若干前後するが、5月初旬頃に南西から雨雲が強風をとま

²¹ 2007年9月13日に開かれた国際連合の第61回総会において採択された「先住民の権利に関する国際連合宣言」は記憶に新しい。条約ではないため法的な拘束力を持たないものの、先住民の慣習的行為や文化を尊重しようとする時勢にあることを確認できる。

²² 彼はこのような森林保護のあり方を「やわらかい保護」という言葉で表現しており、タイ社会を特徴付けているものだと指摘している。

て訪れると、国立公園事務所は宿泊客全員を本土へ送り帰り、閉鎖を宣言する。それから約半年間、スリン諸島にはモーケン以外に、数人の事務所駐在スタッフと海軍兵士しかいなくなる。国立公園側の監視の目は弱まり、モーケン男性はこぞって船を出して漁撈活動にいそしむことになる。自給目的で獲る魚類にはアイゴ科やフェダイ科が多く、素潜りによる銚漁で捕まえる。その他、船釣りやトローリングによってアジ科やハタ科の魚を狙ったり、投網でイワシ群やごくたまにゴンズイ群を捕らえたりする。これらの魚類はあくまで自家消費用であり、各男性は自分の家族が食べるのに必要な分量を獲ったらその日の漁をやめる。収穫の多い日には親族だけでなく近所や親しい友人にも分配し、その逆に何も獲れない時は分け与えてもらう。

それでは、商業目的によるリーフの資源利用の様相はどうか。魚類では、昔はタイマイや鮫、それにマンタなどが捕獲対象となっていたが、現在では法のもと厳しく禁止されているだけでなく、個体そのものの数も減り、換金目的に獲ってはいない。現在、販売することを前提として採捕しているのは、貝類の高瀬貝や夜光貝など、それに棘皮動物のナマコ²³である。それらは基本的には自家消費されることなく、華人市場向けに運ばれるものであり、こうした資源を鶴見（2000）は特殊海産物と呼んだ²⁴。なかんずくモーケンにとって貴重な収入源となっているのがナマコである。棲息域は浅瀬のサンゴ礁や岩礁地帯から海底の砂地までと広く分布しており、古くから各地の「漂海民」によって採捕されてきた動物であった（cf. Warren 2007, 67-74; 長津 2004, 93; 寺田 1996, 224）。南西モンスーンの季節ではあっても天候に恵まれ海が穏やかな期間があり、その間は村落中の男が船に乗り込み、集団でナマコ潜水漁を行う²⁵。通常、島の公開時期に近づく 1~2 ヶ月ほど前に、国立公園事務所からナマコ漁の禁止が通知される。ツーリストが訪れるまでに、海に手を加

²³ 採捕したナマコの加工工程は以下の通りである。まず、切れ目を入れて腸を取り出し、海水をたっぷり入れた大鍋でぐつぐつと煮る。それから微温火の上方に設置したトタンに載せ、時間をかけて水分をとばす。最後に天日干しを何度も繰り返すことで干しナマコ、いわゆるイリコが出来上がる。ここまでの加工をモーケンが行い、仲買人に買い取ってもらう。イリコの商品価値はその形の美しさ、強度（水分が抜けている程良いとされる）によって決まる。

²⁴ 世界各地を歩いてナマコを調査した赤嶺（2010, 268）は、1980年代以降の中国市場の開放や東南アジア諸国の経済成長がすすむ中で、世界各地においてナマコの需要が高まっていることを明らかにした。一部の特殊海産物は、今では中国に限らず世界中の華人市場に向けて輸出されていることがわかる。

²⁵ 村井（1998, 19）は、インドネシアのアル諸島コブロール島バラタン村に暮らす男性がナマコを採捕することに触れ、「10月ごろから翌年4月ごろまでの西風の季節が潜水漁の時期だ。東風の季節（5~9月）は海が荒れ、水が濁るので、潜水漁には向かない」と記述しているが、アンダマン海域でも同様なことがいえる。つまり、南西モンスーン期（5~10月）は潜水漁に向かないのである。しかしながら、ナマコの採捕を黙許されている限定されたこの時期に、スリン諸島のモーケンも潜水漁を行う。

えないことで、可能な限り生態系を元に戻したいという意図があるのだという²⁶。

ところが、2007年の通知は早かった。例年ならば、9月中旬から10月上旬の間に禁止が伝えられるのだが、この年は8月24日であった。同日午後、スリン諸島国立公園 Dam 所長補佐がスタッフを村落に遣わし、ナマコの採捕を禁じる旨を伝達してきたのである。この通知に対するモーケンの反応は大きいものであった。筆者が18時頃にその日の夕食を済ませ、いつものように砂浜に出て男性集団と一緒にいると、国立公園事務所への不満ばかりが聞こえてきた。しばらくは、「海は国立公園のものではない」とか「どうやってここで暮らせというんだ」などの、国立公園側の決定に反発的な意見が多かったのだが、太陽が落ちて闇が濃くなると話をやめて、それぞれの家に戻っていった。次の日から、天気が良く絶好の潜水漁日和であっても、男性陣はナマコの採捕には出かけず、船を修理したり浅瀬で魚類を獲ったりして過ごしていた。すでに不満を漏らす者はおらず、国立公園側の指示に素直に従い、今年はこのまま潜水漁をせずに終わるのかと思っていたその矢先に、ナマコ漁は再び行われた。通知から1週間後の8月31日のことである。

3人のモーケン男性を乗せた船は、14時過ぎにモーケン村落を発って時計回りに進み、カイ島を抜けて南スリン島南西部の海域へ向かった(図3を参照のこと)。それまで幾度となくモーケンの潜水漁に同行してきた筆者であったが、その場所で潜るのを見たのはそれが初めてであった。南西モンスーン期にしては風がなかったとはいえ、それでも普段潜っている場所に比べると波が荒れており、水深も深い。南西からの風がインド洋から直接吹き込む地点であり、波が島の岸壁を削り、サンゴも育ちにくい場所なのである。国立公園がツーリストのために指定しているシュノーケリング・ポイントから外れていることから、リーフが発達していないことがわかるであろう(図5)。そのような海中を潜るのは体力的にも精神的にも疲れるので、潜水ポイントとしては適地ではない。

しかしそのことこそが、モーケンがこのポイントを選んだ理由であった。同行したモーケンからは、「ここは深いから獲れる人は少ない」、「ここなら国立公園も見えないよ」などの発言が聞かれた。つまり、潜水漁に向かない場所だからこそ、潜水技術の高い者だけしか海底深くに棲むナマコを採捕することができず、また国立公園側の監視の目も甘く

²⁶ 2007年9月8日の海軍駐屯所における国立公園事務所スタッフ Samri 氏へのインタビューによる。

なっているというのである。その日の漁は 17 時過ぎに終わり、18 時頃に村落へ戻った。そして、潜水漁を行った者が親族や知人にこの日の出来事を伝えた結果、翌日から南スリン島南西部の海域へ向かい、潜水漁をする者が続出した。モーケン国立公園事務所による管理の視線が地理的にどの程度行き届いているのかをよく観察しており、スタッフの監視の目を掻い潜りながら潜水漁を行っていた。しかしそのような「ブーム」も、10 日間ほどで過ぎ去った。潜水で到達可能な深度にいる底棲生物が集中的に採捕しつくされたのである。

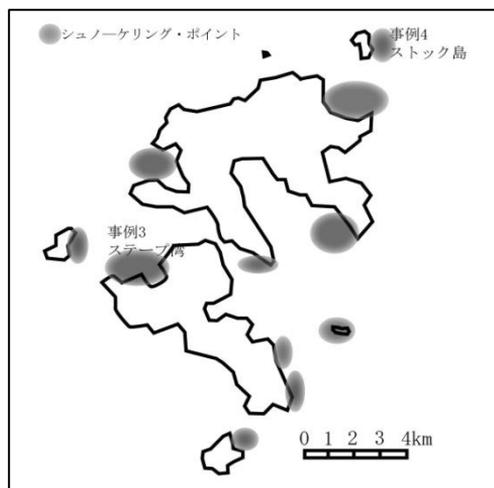


図5 乗合船が連れて行くシュノーケリング・ポイント

以上に見てきたように、南西モンスーン期におけるモーケンの漁撈活動は部分的に黙認されており、潜水漁の禁止が通知されても「密漁」することがある程度可能であることがわかる。だがその一方で、北東モンスーン期における国立公園側の取り締まりは厳しい。リーフの商業目的の資源利用が固く禁止されていることはもちろんのこと、自給目的の利用でさえ監視の目がひかっている²⁷。この時期にリーフの利用を許されているのは、基本的にはツアーリストだけである。国立公園事務所として、法制度を遵守している姿を対外的に示す必要があるし、経済的利益をもたらすツアーリストの利用は優先されなければならない。リーフに海棲生物を獲る者と見る者が同居することは許されず、モーケンはツアーリスト相手の賃労働に専念せざるをえないのである。

国立公園指定以前は、モーケンにとっては北東モンスーンの季節こそがリーフにおける潜水漁の好適期であったのだが、現在では商業目的の利用はもちろんのこと、自給目的の漁撈活動も禁じられるようになった。スリン諸島を訪れるツアーリストが増えるにつれて、国立公園事務所のリーフへの監視の目は強まり、モーケンの季節周期的な漁撈形態は否定されていった。そのかわりにモーケンは観光産業に従事することによって、北東モンスーン期を過ごすようになった。他方で、島が閉鎖される南西モンスーン期には、国立公園側が管理の姿勢を変える。自給のた

²⁷ 北東モンスーン期におけるモーケンの食事は、国立公園でツアーリスト向けに提供されている料理の余りがほとんどである。自給目的の漁撈活動は、子どもや女性による貝類採集や男性による投網漁がたまに行われるくらいである。

めの漁撈を黙視し、特殊海産物の採捕に関しても部分的に黙過している。かつては海の穏やかな北東モンスーン期を中心に行っていた特殊海産物の採捕は、今や天候の安定しない南西モンスーン期に実施するものとなった。モーケンによる特殊海産物採捕の漁撈時期が反転したのである(表3)。

表3 国立公園指定前後におけるモーケンの主な活動

月	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
季節	乾季(涼)			乾季(暑)			雨季					
風	北東モンスーン						移行	南西モンスーン			移行	
指定前	特殊海産物(ナマコ、貝類、マンタ、タイマイ、燕巢等)の採捕						船の建造・修復、一部の特殊海産物(特にナマコ)採捕					
指定後	観光業に従事						一部の特殊海産物(ナマコ、貝類)採捕					

スリン諸島のリーフはもはや、モーケンが独占的に利用できる場所ではなくなった。ツーリストによるシュノーケリングやダイビングなどの娯楽活動が優先されるべき空間となり、モーケンは国立公園の仕事に就くことでツーリストの活動を支えている。では、具体的にモーケンは観光業にどのように関わっているのだろうか。次節では事例を挙げながら、北東モンスーン期におけるモーケンの仕事風景の描写を試みる。

4. 観光に生きる ― 働く場景 ―

北東モンスーン期突入間近になると、モーケン村落はにわかに慌しくなる。男性は木造模型船造りに没頭し、女性はタコノキの葉で小物入れやゴザなどを熱心に編む。第3節の冒頭で紹介したような、モーケンを「見物」しに訪れるツーリストに対して土産用品として売るのである。島が公開されるとモーケン村落では女性が中心となり、ツーリストとの売買交渉を行う。その場景を4.1「村落にて」で検討する。そして本稿でもう1つ扱いたいのが、モーケン男性による海上における仕事風景である。既に述べたように国立公園における男性の主な仕事は船の操舵であるが、時に国立公園事務所スタッフやツーリストの要望に応じてシュノーケリング・ガイドを務めることがある。ここではスタッフやツーリストとのやり取りにおいて仕事が進められている。

本節では、2008年度の公開期（2007年11月16日～2008年5月3日）における、村落と海洋における2つの仕事現場をのぞいてみたい。

4.1 村落にて

ツーリストはモーケン語でオラン・マライ (*orang malai*) という。彼らはオラン・マライと接触した際、2種類の集団に大別して把握することが多い。1つは、モーケン語でオラン・クラ (*orang khula*, 以下 Ok と略す) と呼ぶ人々である。直訳すると「見慣れない人々」となり、主に欧米の人々を指す時に用いられる。日本語のいわゆる外人に近い調子である。アジア系の人に対してもこの言葉を用いることがたまにあるが、西洋人に対してのみ使用されることが多い。そしてもう1つの集団は、オラン・シャム (*orang shaem*, 以下 Os と略す) である。直訳するとシャム人となり、タイ人に対して使用される²⁸。以下、この2分類を採用して話をすすめることにする。

モーケンが村落で販売するものには、男性がつくるカバンの木造模型船と、女性がつくるゴザ、小物入れ、腕輪と指輪がある（表4）。模型船は古くなった木材を利用して造られ、ゴザ

や小物入れなどはタコノキの葉で作製される。これまでの観察によると、模型船に関しては比較的大きいもの（全長 60cm 以上）と小さいもの（全長 30cm 未満）が Ok に売れていた。Ok が大型のものを好むことはモーケンの間でよく知られている事実であるが、大きくなればなるほど高い技術と長い制作日数が必要とされ、造る者は少ない。それよりも小

主要品目	値段(Bath)	主な購入者
木造模型船(大) 全長 60cm 以上	2000～	Ok
木造模型船(中) 全長 30～60cm 未満	200～2000	Ok, Os
木造模型船(小) 全長 30cm 未満	100～500	Os
ゴザ(約 1×1.5m)	200～400	Os
小物入れ	30～60	Ok, Os
腕輪、指輪	10～30	Ok, Os

表4 土産品の値段と主な購入者

²⁸ 本稿で Os と示した人物に関しては、現場でタイ語を使用しているのを確認してはいるが、言語だけで国籍は判断できないので、タイ人ではない可能性もあることをあらかじめ断っておく。これら2分類の他にも、日本人 (*orang yipun*) や中国人 (*orang chin*) などのタイ語から借用した言葉も存在するが、訪問者数が非常に少なく接触の機会がほとんどないこともあり、仮に村落を訪れていてモーケンの視界に入ったとしても、Os として認識されることが普通である。また、ビルマ人 (*orang tanao*) という言葉もあるが、仲買人や漁船に乗る網子を指す際に用いられる程度である。さらに、オラン・クラの例外として、アフリカ系やインド系などの皮膚が黒い人々を指すオラン・クラ・ゲタム (*orang khula kaetam*) があるが、実生活で使用している場面に出くわしたことがない。

型の模型船を短期間で多く造って売る、薄利多売が好まれている。ゴザは Os に購入される傾向があり、小物入れや腕輪・指輪は Ok と Os どちらにも人気があった。全体的には、Ok の方が Os よりも土産品を買っていく傾向があり、モーケン女性はそのことを経験則からよく知っている。そのような背景を把握したうえで、村落におけるモーケン女性の仕事の風景を吟味したい。

<事例 1 ツーリストと交渉する場景>

午前 10 時 16 分、3 日ぶりにツーリストがやってきた。男性 2 名、女性 4 名の計 6 名。そのうち 1 組は Ok。残りの 4 名は Os である。モーケン女性は急いで家から出て、砂浜に敷いたゴザの上に商品を並べ始めた。ツーリストは国立公園事務所スタッフに村落を案内されながら写真を撮っている。タイ人女性のツーリストがモーケン女性 A のゴザの前で立ち止まり、小物入れを手にとった。同行している仲間と値段について話し合っている。女性は A にタイ語で値段を聞くと、A は指を 3 本立てた。女性は 30 バーツかどうか A に聞くが、A はわからないような仕草をして、再び指を 3 本立てた。女性とその仲間は目を合わせた後、笑いながら 30 バーツを差し出して小物入れを 1 つ購入した。(11 月 21 日)

A はタイ語の会話能力がある。ツーリストとのやり取りを不思議に思った筆者は、どうしてタイ語で反応しなかったのか後になって尋ねた。すると、以前 Ok が村に訪れた際に同じような状況になって、その時相手が話している言葉が解らなかったのが指を 3 本だけ立てたら、300 バーツを支払ってくれたことがあったという。それ以来、Ok だけでなく、標準語を話す Os に対しては無言で指を立てることにしたらしい²⁹。村落を訪れたツーリストが Ok なのか Os なのか、さらには中央タイ語話者なのか南方言話者なのかを目と耳で判断し、相手の出方をよく観察しながら交渉しているモーケン女性の姿をここに確認できる。A はどうしたら土産用品をより高く売れるのかを考えながら、カメラを片手に自分達の生活を「見物」しにやって来たツーリストをじっくりと見ているのである。

<事例 1>は、ツーリストがモーケンを「まなざし」、モーケンもまたツーリストをまなざしている場景であるが、次に紹介する事例は、ツーリストとモーケンがお互いの視界に入らないという点において少々変わった場景である。

²⁹ 南方言を話す Os に対しては、タイ語で普通に応じるといふ。その理由は、親近感があるからだといふ。

＜事例 2 屋内にいる場景＞

10 時 03 分、5 名の観光客が訪れる。すべて Os である。筆者のホームステイ先としてお世話になっている世帯の女性 B が外に出ないで、観光客が村落にやって来たことを伝えに行く。すると、B は子守の最中であり、「何人くらい？ Ok は来てる？」と聞いてきた。5 人の Os しか来ていないことを伝えると、「どうせ買わないから」と言い、外に出なかった。(12 月 11 日)

子どもをあやしている最中にあるとはいえ、B は明らかに Ok の観光客がいないことを理由に家から出ていない。観光客の種類 (Os なのか Ok なのか) と人数を勘案した上で、売りに行かないことを決断したと考えられる。やや強引なことを承知の上で、この事例を視覚に関連付けて考えてみるとどうであろうか。B が家から出なかったことは結果として、観光客による視覚にとらわれていないことを意味しているとはいえないだろうか。アーリ (1995, 21) は「観光のまなざし」の「潜在的な対象は、なんらかの意味で異質」であり、「とくに日常で典型的に逢着するものと異なった意味とか異なった規模が内包された、異種の楽しみを経験するはずなのだ」と指摘している。モーケン村落を訪れる観光客の場合、自分達とは異なる生活を送る少数民族の姿に価値を見出し、そこに「まなざし」を向けることで楽しみを経験していると考えられる。そうだとすれば、少数民族の姿が視界に入らないような村落観光は、観光客にとって好ましいものではない。B は土産物の売買を通じた観光客との交渉を放棄し、彼らの目の届かない屋内にとどまることを意思決定している。B は村落訪問者が Ok である場合は土産物売るために外に出て、観光客の「観光のまなざし」を受け入れ彼らを楽しませることに貢献するが、訪問者が Os の場合はその逆の状況をつくりだしていると解釈できる。＜事例 2＞からは、相手によって自律的に身の置き方を変えている、観光客の視覚に一方的に「所有」されることのないモーケン女性の姿を確認できる。

以上 2 つの事例を、「物売る」という観点から眺めると何がみえてくるだろうか。＜事例 1＞で気付くのは、「話さない」という態度をとることで販売額の増加を見込む、偶然性に頼った方策が採られていることである。＜事例 2＞では、Os に「売らない」という立場に立つことで、Ok が来た時に売ろうとする効率性重視の方策が採られていることに目が留まる。これらの事例で特に注意を払いたいのが、いずれもモーケン女性が Ok を意識した物の売り方をしている点にある。＜事例 1＞からは、Ok との交渉が契機となり発案した戦略を、したたかに用いる女性の姿が

確認できるし、〈事例 2〉からは、経験則から Ok を客にした方が売れると判断している女性の態度を読みとることができる。このことは、観光地化したスリン諸島において、モーケン女性が単に観光客の「まなざし」を受けているだけの存在ではないことを示唆している。

では次に、モーケン男性が働く場をのぞいてみよう。

4.2 海洋にて

スリン諸島を訪れる多くの観光客が楽しみにしている最大のアクティビティ、それはシュノーケリングである。国立公園が提供するシュノーケリング用の船には、乗合船と貸切船の 2 種類がある。乗合船は、一人につき 80 バーツ（≒240 円）を支払うと、約 3 時間の間に 2～3 地点でシュノーケリングをすることができる。通常、1 隻につき 12～15 人を乗せて運航する。貸切船は、2,000 バーツ（≒6,000 円）を支払えば、1 日中（通常 9 時～16 時）好きな場所を指定して動くことができる。船の大きさは乗合船と変わらず、乗客数は何人でも構わない。いずれの船もモーケン男性が操舵手として 1 人、それに国立公園事務所の男性スタッフが船頭として 1 人つくのが普通である。

あらかじめ決められたシュノーケリング・ポイント（図 5 を参照のこと）に着くと、着水の準備ができた者から海に飛び込む。概して Ok の客が先にとダイブし、その後を Os が追いかちをとる。Os の客には泳ぎが苦手な人が多く、モーケンが付きっきりで泳いであげることも多い。またごくたまにはあるが、Ok の中にもモーケンをわざわざ指名して一緒に潜る客がいる。以下では、モーケンが Os と Ok と泳いでいる時のそれぞれの場を眺めることにしたい。

〈事例 3 Os と泳ぐ場〉

乗客は 12 名、男女 1 組が Ok、10 名が Os である。内訳は男性が 5 名と女性が 7 名。9 時 20 分、ステーブ湾に到着。乗客は Ok 以外の全員がライフジャケットを着用したまま着水し、操舵手のモーケン C が女性 3 名を案内した。C は片手にライフジャケットを握り、そこから垂れている紐を女性客が掴んでいた。女性客は浮かんだままの状態、C が泳いで引っ張った方向へ動く。C は水深 3～5m 程度のリーフ内を浮泳し、点在するイソギンチャクを見つけては静止して、時間をかけて女性客にカクレクマノミを見せていた。（11 月 25 日、乗合船）

実は、モーケンがカクレクマノミを探し、ツーリストに見せるという一連の流れはこの時に限らない。他の客に付いた時にも、最初に案内するのがカクレクマノミである。その理由を C に尋ねると、「見つけるのが楽で、Os に見せると喜ぶから」だという。こうしたツーリストの好みは国立公園事務所スタッフにも知られており、彼らによると映画『ファインディング・ニモ』（2003 年）がタイで公開されてからのことだという。海外で製作されたアニメーション映画を鑑賞した Os が、スリン諸島のリーフにおいて「ニモ」を見つけて喜ぶ。そうしたツーリストの見る行為を支えている、モーケンの姿を確認できる。

<事例 4 Ok と泳ぐ場景>

乗客は 9 名、全員が Ok。内訳は男性が 6 名と女性が 3 名である。14 時 34 分、ストック島に到着。男性客の一人が船頭に大物を見たいことを伝えると、操舵手のモーケン D が 4 名（男性 2 名と女性 2 名）を案内することになった。4 名ともライフジャケットは着けず、フィンを使用しており泳ぎに問題はなさそうであった。D は造礁サンゴの群生がある浅瀬から沖合の方向へ移動し、水深 15~20m 程度のリーフ・エッジで 4 名を連れてゆっくりと泳いでいた。その途中で海亀一匹に遭遇し、D はしばらく浮遊したまま静止して、客と一緒に海亀を眺めていた。（3 月 2 日、乗合船）

この後、船上に上がった D は筆者に、「海亀は見たか？」と尋ねてきたので「見た」と答えると、「高瀬貝もあつただろう。今度とりに来よう。」と話を続けた。この瞬間、高瀬貝の存在に気付かなかつた筆者は、目を開かれる思いをした。彼の視野の広さに感服したのは確かだが、驚いたのはそのことではない。国立公園に指定されたスリン諸島のリーフは、乾季の間はツーリストの視覚に独占されていると私は考えていたのだが、必ずしもそうではないことに気づかされたからだ。彼はツーリストの希望に沿って海中で「大物」を探していた。そこでは、観光活動のために海棲生物を〈見る〉行為が実践されている。ところが、それと同時に D は、リーフにおいて後日〈獲る〉ための観察も行っていた。国立公園化によってアンダマン海のリーフは〈見る〉活動が優先される場になったとはいえ、モーケンにとってはいまだに〈獲る〉海としても存在していることがわかる。

近年の観光化の進展によって、アンダマン海域のリーフが〈獲る〉から〈見る〉場所へ変容したという指摘に、筆者はその大筋において同感である。しかし、それでも〈獲る〉リーフとしての空間もかなりの部

分で残されているのではないだろうか。たしかにスリン諸島では、国立公園事務所がモーケンの〈獲る〉視覚を可能な限り制限しようとし、ツアーリストの楽しみとして〈見る〉視覚を支持してきた。だが、それでもモーケンは国立公園事務所の監視の目を敏感に感じ取って漁撈活動を続けているし、ツアーリストが隣で魚を見て楽しんでいる時にも一人の漁撈者として泳いでもいた。現在のアンダマン海域は、〈見る〉場所になってきているものの、漁撈者はシュノーケリングなどの観光活動さえも利用しながら、自らの〈獲る〉空間の拡大に努めていると解釈できる。

以上 2 つの事例をみて、モーケンがツアーリストの水泳能力に合わせて泳いでいることはすぐに気付く。また、ツアーリストの視覚のあり方に影響を受けているモーケンの姿にも目が留まる。漁撈者としてのモーケンにとって、カクレクマノミは食用資源にならないので、注意を払うべき対象ではない。ところが、ツアーリスト（特に Os）が喜ぶ対象であることを知ると、カクレクマノミを観光資源として捉えるようになった。また、海亀の肉を食用としてきたモーケンが、目の前を泳ぐ海亀をツアーリストと一緒に眺めている場面も、国立公園指定以前では考えられない光景である。ツアーリストの「まなざし」の要求に応えるために、海棲生物を以前とは異なる視覚のあり方で捉えるようになったのである。

おわりに — 視覚の網の目 —

グローバル化の進展は世界中のあらゆる場所同士を結びつけ、ヒトやモノの移動を促してきた。グローバル化の特徴は観光現象に顕著に表れており、観光目的で国内外を移動する人の数は近年急激に増加していることを冒頭で確認した。本稿の記述対象国タイでは、政府が先頭に立ってインフラストラクチャーの整備や観光推進政策をすすめることで、観光立国としての地位を築いてきていた。観光開発の進展はタイ南部アンダマン海域にも及び、リーフを観光資源化することでツアーリストを集めてきた。そして、リーフの観光資源化をさらに推し進めたのは、政府による海洋国立公園化であった。国立公園に指定される以前よりリーフを生業の場としてきた人々は、観光業に従事することでリーフに残るか、あるいはリーフから立ち退くかという、どちらかの選択を迫られることになった。

本稿で取り上げた「漂海民」モーケンは、前者を選んだ。彼らが生活の場としてきたスリン諸島とその周辺海域は、リーフの観光資源化が急速にすすんだ的例を示していた。1981年にスリン諸島が海洋国立公園に指定されると、モーケンはツアーリストの「まなざし」の対象になると同時に、国立公園から監視される対象となり、リーフにおける漁撈活動

は制限された。アンダマン海域の国立公園化の影響により、モーケン人は自由に海上移動することができなくなり、スリン諸島への陸地定着の度合いを強めていった。

とはいえ、モーケンによる漁撈活動は完全になくなったわけではなかった。閉鎖期間中の南西モンスーン期には、モーケンによる自給目的のリーフの資源利用は、国立公園事務所から黙許されているだけでなく、商業目的の利用も限定的に黙過されていた。また、たとえ潜水漁の禁止が通知されても、モーケン人は国立公園の監視の目を掻い潜りながら漁を行っていた。他方で、北東モンスーン期に入れば国立公園事務所の柔軟な姿勢は一転し、モーケンによる資源利用を厳しく監視し、リーフでの活動を可能な限り制限していた。モーケンの漁撈時期は反転し、北東モンスーン期は観光に従事する季節となった。そのようにして、同時期のスリン諸島はツーリストの「まなざし」で溢れる空間となった。

ところが、ツーリストで埋めつくされた北東モンスーン期のスリン諸島においても、モーケンの視覚はツーリストのそれと呼応するように働いていた。観光に関わるようになったモーケンは、島を訪れるツーリストを **Ok** と **Os** とに大まかに分類し、モーケン女性はツーリストをじっくり観察し、経験則をもとに戦略的に土産品販売を行っていた。かたや海洋で操舵手として国立公園の賃労働に従事する男性は、シュノーケリング客による海棲生物を〈見る〉活動を後ろから支えていた。それと同時に、近い将来〈獲る〉対象としても視線を投げかけていた。以上が、本稿の大筋である。

これらのことが示唆するのは、観光の現場をツーリストの視覚のみで説明することが不十分であるということである。観光地におけるツーリストと少数民族の関係は、単に前者が後者を視覚によって一方的に「所有」したり、客体化したりするという単純な話ではない。もちろん、ツーリストは外から自由にスリン諸島を訪れ、また離れることができる一方で、モーケンはその場から出ることも、ツーリストの暮らす場所へ行くことも困難であるという、政治経済的に不公平な構造があることは否定できない。しかし観光の現場を微視的に眺めてみると、ツーリストが少数民族を一方的に「まなざし」しているだけでなく、少数民族もまたツーリストに熱い視線を浴びせていることがわかる。両者は「見る」主体であるとともに、「見られる」客体でもあり得るという、相互の視覚に影響を与えあう存在なのである。

だからといって、少数民族とツーリストの二者関係のみで、観光の現場における視覚の相互行為性をすべて説明できると主張するつもりはない。なぜなら、観光現象は単純なホスト-ゲスト関係のみで成立するものではないからである。特に、少数民族が暮らす地域は、本稿で取り

上げたスリン諸島のように、国家の地理的な辺境に位置することが多く、行政機関が関与する場合が普通である。そこでは、少数民族とツーリストの間における視覚のあり方に、両者を管理しようとする行政機関の視覚の働きも複雑に絡み合ってくる。さらに近年では、少数民族の居住地を包括した地域が世界遺産に指定されることもあり、その場合、超国家的なアクターの視覚がこれに加わることになる³⁰。観光の空間には様々なアクターが存在し、それぞれの視覚が網の目のように張りめぐらされている。そうした一つ一つの視覚を固定的なものではなく、相互に影響を受け合い流動的に変化するものとして捉えることが、観光の現場を動態的に把握するためには重要であろう。

謝辞

本研究の実施にあたり、寺田勇文先生<上智大学>とナルモン (Dr. Narumon Arunotai) 先生<チュラーロンコーン大学>から多角的な指導を受けました。また、匿名の2名の査読者から、貴重な助言と指摘を頂きました。心より感謝の意を表します。なお本稿は、国際交流基金アジア次世代リーダーフェローシップ (2006年度) と富士ゼロックス小林節太郎記念基金小林フェローシップ (2007年度)、そして文部科学省科学研究費補助金・特別研究員 (2008~2009年度) の助成による成果の一部です。また、タイ王国国家学術評議会 (NRCT) の許可を得て現地調査が可能となりました。ここに記して、それぞれの機関に対して深謝します。

参考文献

- アーリ、ジョン. 1995. 『観光のまなざし：現代社会におけるレジャーと旅行』加太宏邦訳,法政大学出版局.
- 赤嶺淳. 2010. 『ナマコを歩く：現場から考える生物多様性と文化多様性』新泉社.
- 綾部真雄. 2003. 「ねじれた首都：山地民にとってのもうひとつのバンコク」『アジア游学57：バンコク 国際化の中の劇場都市』勉誠出版: 99-110.
- 石井香世子・チャイヤシット, アヌチットウオラウオン. 2009. 「タイにおける観

³⁰ 実は現在、スリン諸島を含めたアンダマン海域を、世界遺産リストに登録しようという動きがある。もしそれが現実となった場合、モーケンは今まで以上に多くのアクターに対応しながら、自らの視覚のあり方を再構築していくのであろう。

- 光と少数民族：タイ北部『首長族』観光を考える」藤巻正己・江口信清（編）『グローバル化とアジアの観光：他者理解の旅へ』ナカニシヤ出版: 97-112.
- 市野澤潤平. 2009. 「楽しみとしての＜自然＞保護：インド洋津波後のタイ南部アンダマン海におけるサンゴ修復ボランティア」『文化人類学研究』10: 102-31.
- . 2010. 「＜獲る＞海から＜見る＞海へ：ワイルドライフ・ツーリズムによるリーフの観光資源化」『年報タイ研究』10: 17-34.
- 柿崎一郎. 2002. 「タイにおける『開発』の時代の道路整備1958~1973：高規格道路の急増」『年報タイ研究』2: 1-23.
- 金柄徹. 2003. 『家船の民族誌：現代日本に生きる海の民』東京大学出版会.
- 城前奈美. 2008. 「タイにおける観光産業開発：投資奨励と外資規制」『長崎国際大学論叢』8: 75-84.
- 末廣昭. 1993. 「観光産業」石井米雄・吉川利治（編）『タイの事典』同朋舎: 90.
- 鈴木佑記. 2006. 「モーケン、モクレン、ウラク・ラウオイツ：タイとビルマの海民の民族名称に関する考察」『年報タイ研究』6: 149-64.
- . 2010. 「『悪い家屋』に住む：タイ・スリン諸島モーケン村落の動態」林勲男編『自然災害と復興支援 みんぱく実践人類学シリーズ9』明石書店: 155-80.
- 須藤廣. 2008. 『観光化する社会：観光社会学の理論と応用』ナカニシヤ出版.
- 須永和博. 2004. 「自然／文化をめぐる交渉：パーチュムチョン、ライムンウィアン、そしてエコツーリズム」『年報タイ研究』4: 63-80.
- 鶴見良行. 2000. 『海の道 鶴見良行著作集8』みすず書房.
- 豊田三佳. 1996. 「観光と性：北タイ山地の女性イメージ」山下晋司（編）『観光人類学』新曜社: 131-40.
- 寺田勇文. 1996. 「スルー海域のサマ族：海洋民の『国民化』過程をめぐって」綾部恒雄（編）『国家のなかの民族：東南アジアのエスニシティ』明石書店: 217-52.
- 長津一史. 2004. 「越境移動の構図：西セレベス海におけるサマ人と国家」関根政美・山本信人（編）『海域アジア 現代東アジアと日本4』慶応義塾大学出版会, 91-128.
- 羽原又吉. 1963. 『漂海民』岩波新書.
- 藤田渡. 2008. 『森を使い、森を守る：タイの森林保護政策と人々の暮らし』京都大学学術出版会.
- ベルナツィーク、H・A. 1968. 『黄色い葉の精霊』大林太良訳, 平凡社.
- 細川弘明. 2003. 「タイ西部、世界遺産地区の先住民族の村を訪れて：上」『先住民族の10年News』91: 10-13.

- ホワイト、W・G. 1943. 『漂海民族：マウケン族研究』 松田銑訳, 鎌倉書房.
- 村井吉敬. 1998. 『サシとアジアと海世界：環境を守る知恵とシステム』 コモンズ.
ロチャナブルック、プラウィット. 1999 『タイ・インサイドレポート「成長神話」
の夢と裏切り』 永井浩訳, めこん.
- Arunotai, Narumon, et al. 2006. *Withi chiwit Mokaen* (モーケンの生活形態).
Bangkok: Chulalongkorn University Social Research Institute.
- Arunotai, Narumon, Supin Wongbusarakhum, and Derek Elias. 2007. *Bridging the gap
between the rights and needs of indigenous communities and the management of
protected areas: case studies from Thailand*. Bangkok: UNESCO Asia and
Pacific Regional Bureau for Education.
- Bernatzik, Hugo Adolf. 1939. The colonization of primitive peoples with special
consideration of the problem of the Selung. Trans. H. H. Prince Devawongs
Varodaya. *Journal of the Siam Society* 31(1):17-28.
- Carrapiett, W.J.S. 1909. *The Salons*. Rangoon: Ethnographical Survey of India.
- Caruwat, Chaluemchai. 1960. Kandanneunngan khong Oo. So. Tho (オーソートー、
仕事に着手). *Oo So Tho* 1(1): 9-13.
- Cohen, Erik. 1996. *Thai tourism: Hill tribes, islands and open-ended prostitution*.
Bangkok: White Lotus.
- . 2004. *Contemporary tourism: Diversity and change*. Oxford: Elsevier Ltd.
- DNP (Department of National Parks, Wildlife and Plant Conservation) website.
Accessed November 25, 2010. <http://www.dnp.go.th>.
- DNP. 2004. *Phraratchabanyat Utthayan Haengchat Pho. So. 2504 lae Kot Rabiap thi
Kiaokong kap Utthayan Haengchat* (1961年国立公園法及び国立公園関連規則).
Bangkok: DNP.
- . 2007. *Prakat Krom Utthayan Haengchat Satpa lae Phanphuet Rueang
Kankamnot Chamnuean Nakthongthiao thi khao pai nai Utthayan Haengchat* (国
立公園野生動物・植物局による国立公園の入場者数制限に関する布告).
Bangkok: DNP.
- . n.d. *Utthayan Heangchat Mu Ko Surin* (スリン諸島国立公園〈パンフレッ
ト〉). Bangkok: DNP.
- Hinshiranan, Narumon. 1996. *The analysis of Moken opportunistic foragers' intragroup
and intergroup relations*. PhD diss. Honolulu: University of Hawai'i.
- Ivanoff, Jacques. 1997. *Moken: Sea gypsies of Andaman post-war chronicles*. Bangkok:
White Lotus.
- . 1999. *The Moken boat: Symbolic technology*. Bangkok: White Lotus.
- Krom Pamai (タイ王立森林局). n.d. *Raingan Chabap Sombun Khomun Puenthan
Phaenmaebot Utthayan Heangchat Mu Ko Surin Changwat Phangga* (パンガー
県スリン諸島国立公園マスタープラン基礎情報最終報告書). Bangkok:

Suansapphayakon Thidin lae Pamai Krom Pamai.

- Peleggi, Maurizio. 2002. *The politics of ruins and the business of nostalgia*. Bangkok: White Lotus.
- Phanga Province Office of Tourism and Sports website. Accessed November 25, 2010. <http://secretary.mots.go.th/phangnga>.
- Phuket Gazzete. 2007. Rough seas sink ferry. *Phuket Gazzete*, August 22. Accessed November 26, 2010. <http://www.phuketgazette.net/news/detail.asp?id=5905>.
- . 2008. Trawler sinks off Kho Rachayai. *Phuket Gazzete*, July 18. Accessed November 26, 2010. <http://www.phuketgazette.net/news/detail.asp?id=6645>.
- . 2009. Andaman Sea storms sink Thai bulk-carrier. *Phuket Gazzete*, August 25. Accessed November 26, 2010. <http://www.phuketgazette.net/news/detail.asp?id=7708>.
- Sarit Thanarat. 1961. Khamprasai khong Phanahua Nayokratthamontri to Prachachon Chaothai (タイ国民へ向けた首相からの挨拶：政務調査視察に関して), *Oo So Tho* 1(11):33-38.
- TAT website. Accessed November 25, 2010. <http://www.tourism.go.th>.
- TAT. 1988. *Khrongkan Samruat Kanthongthiao Phainai Prathet Pi 2531 Phak Tai* (1988年度タイ南部観光調査プロジェクト). Bangkok: TAT.
- . 2008a. *International tourist arrival 2007 Vol. 1*. Bangkok: TAT.
- . 2008b. *Sathiti Kanthongthiao Phainai Prathet Phaktai Pi 2550* (2007年度タイ南部観光統計). Bangkok: TAT
- . n.d.1 *Statistical report of visitors to Thailand 1957-1978*. Bangkok: TAT.
- . n.d.2 *Sarup Phaenlak Phattana Kanthongthiao Changwat Phuket* (プーケット県観光開発基本計画案). Bangkok: TAT.
- Thon Thamrongnawasawat and Anuwat Saisaeng. 2007. *Khumue Andaman Pla Naewpakarang* (アンダマン海域便覧：サンゴ礁に棲む魚). Bangkok: Sannakngan Phatthana Kanwichai Kankaset.
- UNWTO (United Nations World Tourism Organization). 2008a. *Tourism market trends, 2007 edition: World overview*. Madrid: UNWTO.
- . 2008b. *Tourism highlights 2008 edition*. Madrid: UNWTO.
- Warren, James Francis. 2007. *The Sulu zone 1768-1898: The dynamics of external trade, slavery, and ethnicity in the transformation of a Southeast Asian maritime state (2nd ed.)*. Singapore: National University of Singapore Press.
- WTTC (World Travel & Tourism Council). 2007. *Progress and priorities 2007/08*. London: WTTC.

Yuki Suzuki is a PhD candidate in the Graduate Program in Global Studies and a Collaborative Research Fellow in the Institute of Asian Cultures at Sophia University. One of his recent articles is “Living in the “Bad House”: Dynamics of the Moken Village in the Surin Islands, Thailand” (2010). His research interests include Cultural Anthropology and Area Studies. His present research focuses on the process of commodity circulation of sea products, especially sea cucumber (*holothuroidea*) and great green turbo (*turbo marmoratus*) in Asian Maritime World.